

## シリーズ 学校現場から悲鳴が聞こえる

### 第6回 「教諭等の35.6%が過労死ライン上」

全日本教職員組合（全教）が2012年10月1日～7日の1週間をゾーンとしておこなった勤務実態調査に全国39都道府県から6722名分の回答がありましたが、それによって教職員の長時間過密労働の実態が明らかになりました。結果は以下の通りです。

1ヶ月の平均時間外勤務は、平日で56時間35分、土日で15時間58分の合計72時間34分です。持ち帰り仕事時間は、平日13時間08分、土日9時間15分の合計22時間24分となっています。両方を合わせると94時間59分となり、この数値が平均値であることから、異常な働き方になっていると言えます。全教によると、教諭等の75%が45時間以上の時間外労働をおこなっており、35.6%が「過労死ライン」と言われる80時間以上という実態が示されました。群馬の高校現場でも例外ではありません。今回は勤務時間について現場の教職員に聞きました。

#### 授業準備は帰宅後、深夜まで

記者「10年前の同じ調査では、1ヶ月の平均時間外勤務時間は85時間32分でしたので、この10年間におよそ10時間増加したことになります。この点についてどう思いますか。」

F氏「職員室の施錠時間が決まっており、勤務時間終了後は早く帰れるようにはなってきました。しかし、生徒のデータづくりなど持ち出せない仕事をやっているという間に勤務時間が終了してしまい、結局授業準備（教材研究等）は家に帰ってから何時間もかけてやらざるを得ない状況があります。」

G氏「私が勤務する学校では土曜補習はありませんが、部活指導・引率で土日はほとんど休みがありません。休日は月に2～3日、2連休が取れるのは2～3ヶ月に一度くらいです。2012年は忙しい時期になると月に1日しか休みがありませんでした。」

H氏「少し話しが長くなりますが1日の勤務を説明したいと思います。朝の7時には仕事を始めなければ片付かないことが多々あり、その場合遠距離通勤なので5時に起床となります。担任を持っていると生徒指導

や進路指導に多くの時間が必要となります。受け持ちの生徒に問題行動が出ると、基本的には担任の指導方法が問われ、生徒指導に掛かる時間は相当なものがあります。しかも、私が勤務する学校では担任以外でも処理できると思われる仕事が次々と担任に回ってきます。精神的にも大きな責任とプレッシャーを負わされる上に、負担が次々と積み重なっているのが現状です。更に分掌の仕事の多さにも心身ともに追い詰められています。大規模校なのですが、うまく仕事が分散されていないと感じています。昼食を抜いて仕事をする日もあり、どんなに効率よく仕事をして、夜の8時過ぎまで超過勤務をしなければならぬ日もあります。帰宅して就寝するのは12時を過ぎることも多々あります。Fさんも言っていますが、教材研究は持ち帰りがほとんどで、学校全体に関わる分掌の仕事に取り組むだけで平日の時間を使ってしまった場合は、担任業務などは休日に出勤してやらねばなりません。」

記者「昼休みは45分ありますがなかなか取れないですね。私は生徒会を担当していたので昼休みに会議を入れることが多く、3～5分で食事を取っていました。本来は問題ですが、全教の実態調査でも昼休みや放課

後に生徒指導が集中しています。  
Hさんも昼食が取れないときがあると  
言っていますが、やらなければ回ら  
ないというジレンマを抱えています。  
部活指導も同じですね。」

G氏「私はたまたま希望する部活の指  
導ができており、また、生徒の活  
躍する様子を見るのが好きでやっ  
ていますが、今の世の中における  
教員への風当たりの強さを思うと  
『休みも無くこんなに頑張ってい  
るのに』と悲しく思うときがありま  
す。」

F氏「勤務時間終了と同時に部活動を  
終わりにしていたのでは活動時間  
も十分に確保できず、生徒や保護  
者の要望等もあり、勤務時間終了  
後も指導されている方は多いで  
すね。」

## 仕事内容の見直しで、職場合意を

記者「Hさんはうまく仕事が分散され  
ていないと言いましたが、これにつ  
いて聞かせて下さい。」

H氏「最近強く感じることは同じ『忙  
しい』という言葉を使っているも、  
忙しさは同じではないということです。  
教員の多忙化が叫ばれていますが、  
職場でも忙しいという言葉をよく  
聞きます。ある先生は、のんびりと  
仕事ができないという意味で『忙  
しい』と言います。また、ある先生  
は7時間45分の勤務時間をフルに  
使い、一息つく時間が無いという  
意味で『忙しい』と言います。そし  
て、私を含め一部の教員は、効率よ  
くこなしても勤務時間内では終わら  
ない量の仕事を抱え、絶望感ととも  
に『忙しい』と言います。このこと  
を理解していないと、教職員間でも  
『忙しいのは皆同じだ』、『やり方  
の問題だ』という誤った認識が広  
まり、抱えきれないほどの仕事を  
持つ教職員を更に追い詰めること  
になります。教職員がしっかりとつ  
ながり、よい学校、よい職場



をつくっていくためには、自分の仕事  
が適正かどうかを考えるだけでなく、  
周囲の教職員にも気を配ることが  
必要であると思います。全教職員  
が一丸となって、教育現場が多忙  
な状況を問題として認識し、解決  
のために動いていく、これができな  
ければ若い世代を中心に病んでしま  
う教職員が今後も増えていくので  
はないでしょうか。」

記者「文科省は頑張っている教職員  
に対するメリハリのある給与や、部  
活動手当や管理職手当などに限った  
手当改善の検討に舵を切ろうとし  
ていますが、これでは教職員が分  
断されてしまいます。全教は、対象  
を限定した手当ではなく、現実にあ  
る時間外勤務全体に対する手当措  
置を設けることで、時間外勤務の  
総量を強く間接規制することが必要  
だと言っています。Hさんが言うよ  
うに教職員がしっかりとつながるこ  
とは大事ですね。その上で、仕事  
の内容の見直しで絶対量を減らして  
いく必要があるのではないでしょ  
うか。私が現役でいた頃、管理職  
は思いつきで仕事を増やしてく  
ることがありましたが、スクラップ  
&ビルドが必要ではないかと職員  
会議で議論しました。過労死は絶  
対あってはならないことですから。」